批評・紹介

日出づる國と日暮るゝ處　宮崎市定著

昭和十八年八月三十日　星野書店發行
B6判　二二二頁　定價　二圓五十九錢

宮崎先生から奇麗な本を頂いた。

あけて見ると上等の紙に大きな活字でゆつくり組んだ、そして寫眞もかなり入つてゐる、要するに今日としてはまるでほんものゝ小豆と餅で作つたおしるこを眼の前に置かれたやうな氣のする本である。よんで行くと又その風味の結構なこと、これまたほんものゝしるこを頂戴してゐる感じがしてきて、毎日砂糖氣のない大根ばかり食べてゐる私などは、ついほろりとしさうになるのである。

かういふ上等の本を頂いた有難さを別にしても私にはこの本が特に好ましい理由がまだある。といふのはこの本をよんでゐると、亡くなつてかれこれ十年にもなり、去る者は日々に疎くなりかけてゐる私の父に出逢つたやうな氣が何となくして來て仕方がない。例へば「江戸時代に於ける支那趣味」の一篇を、ものゝ二頁と讀まない内に私が思ひ出したのは、私の父が京都の博物館で夏の暑い時に扇を使ひながら數時間ぶつ通しでやつた「本邦南畫の鑑賞に就て」（支那繪畫鑑所收）といふ講演であつた。事實また宮崎先生はその講演を多少參考にして居られるやうだ。けれども私の感する類似はなにもどの部分がどうといふのでなく先生の物の考へ方や感じ方自體がどうも私の父と同質のものゝやうに思へてならないのである。本書中の力作である「倭寇の本質と日本の南進」などが特にその感が私には強い。私の父の「支那論」を讀まれた人はこれが必しも私の自家宣傳ばかりではないことを少しは解つて頂けると思ふ。

尤も先生の結論とせられる所はこの倭寇の話にしても卷末の「支那の開國と日本」にしてもいさゝか時局向きになつてゐる。だが結論は私には用はない。今日我國に於けるあらゆる議論の結論はたつた一つしかないことが明白な以上問題になるのはその道程と論者のお人柄とだけなのだから。

この書物に收められてゐる各篇の紹介は先生自身がその自序で要領よくされてゐるから私は讀後の感想だけをいへばよいわけだ。

上にふれた「倭寇の本質と日本の南進」と「江戸時代に於ける支那趣味」と「支那の開國と日本」（支那的體制と日本的體制）の三篇が最もよみごたへのある篇である。中でも倭寇の話が壓卷であつて、もう少し長ければこれだけで當然一册の本になつてゐた筈だ。結論と年表的智識とを機械的にくつつけてそれをジアーナリズム的な文章と常識でうすめて一册の本に引き伸ばすこと、これが近頃の書物製造のコツらしい。かういふ時代に專門家がより深いより正確な智識をひつさげて一般の關心

事を論ずるのはたしかにいいことである。併しながらたゞ一つ注文がある。專門家よ、結論を急ぐ勿れ。

「留唐外史」は私には一つの諷刺物語だつた。題材は弱志薄行の一留學僧の話に過ぎないが讀む人間の器に應じてこの物語からは色々な諷刺を引き出すことが出來る。この諷刺小說は題材がほんとの事實であつたといふ點でいかなる小說家も持ち得なかつた所のいひ知れぬ强味を持つてゐる。歷史家の武器をこんなに有効に利用した人はさう澤山はあるまい。

「巴里にて刊行せられたる北京版の日本小說其の他」先生自身はそんな深い魂膽があつて書たのではないといはれるかも知れないが考へて見ればこれはすゐ分人を食つた話である。さすがの私も先生の大膽さにはいさゝか驚いた。歷史家の武器もかうなると少々藥が利きすぎる。

明快を以て特長とする先生のお話の中で「雷を天神といふこと」の一篇だけはどうも私にはすつきりと話の筋が一度讀んだだけでは呑み込みかねた。この話の一體どこが眼目なのか。

支那では天神の名が失せて、雷の信仰が稍形を變へ乍らも今に繼續し、日本では天神の名だけが殘つて、雷の信仰は殆んど廢れて了つてゐる。只兩方の根源を段々辿つて行くと、どうやら一つのものに歸着するらしいのである。

といふのが結論らしいのだがこれだけでは先生の結論としては餘りに平凡過ぎる。だが民族學とは一體何をする學問なのかも知らない私にとやかくいふ資格はない。(內藤戊申)

支那繪畫史研究

下店靜市著

近刊、下店靜市「支那繪畫史研究」は本文四七〇頁、圖版アート紙一〇五葉、原色版四葉。その體裁からみて今日の單行本としてすこぶる惠まれた出版である。

この書物は十一の論文から成つてゐて、大體、支那繪畫史を古代から近世まで通覽しつゝ、時代を追つて叙述をすゝめる體裁であるやうに思はれる。しかし著者は本書を支那繪畫史概說と呼ばず、支那繪畫史研究と呼んでゐるので、讀者はまづ本書に概說以上の細部的な論說や又は批判的な言說の多分に包藏せられてあることを豫想してよい。著者は「序に代へて」のなかで彼の意圖するものを次のごとく述べてゐる。

「此の研究に手を染めて以來早くも二十年に近い歲月が夢のやうに流れた。……支那畫と日本畫との史的關係は密接であり、その研究は決して一方的であり得ない。本書は元來私の大和繪史研究がその端緒で、大和繪研究が進むにつれて淵然として開けたのが支那畫の世界なのであつた。……新しい立脚地、新しい方法等はその間に次第にまとまつて來た。廻り道をしたり、退いてみたり、やり直しをする事は進出を阻害したが、それらはしばしば此の學問が若すぎるためでもあつたとおもふ。このやうにしてその本流を究め、本質を明らかにし、新しい體系を樹立するに意をそゝいだ。古代人の心に立返つてこれを見直す、考直す事は當然な態度でありながら怠られ勝ちであり廣